

<論 説>

信用理論の基本構造(三)

鈴木 芳 徳

目 次

1. はじめに
2. 信用理論における陥穽
 - (1) 再生産と信用制度
 - (2) 貨幣流通と信用制度
3. 利子つき資本と信用制度
4. 「信用と仮空資本」への道
 - (1) 社会的総資本の流通過程
 - (2) 商業手形と手形流通……………

…以上『経済貿易研究』第12・13号(合併号), 1987年3月, 所載
5. 「貨幣資本と現実資本」への道
 - (1) 利子つき資本の認識と「貨幣資本と現実資本」
 - (a) 利子つき資本の認識
 - (b) 「貨幣資本と現実資本」と「貨幣資本蓄積」
 - (c) 貸付可能資本
 - (d) 貨幣資本蓄積の特異性
 - (2) 先行諸学説への反省的考察……………

……以上『経済貿易研究』第14号, 1988年3月, 所載
6. 仮空資本論への接近
 - (1) 仮空資本論への基本的姿勢
 - (2) 「擬制的貸付資本」としての仮空資本理解について
 - (a) 「擬制的貸付資本」
 - (b) 「商業信用と銀行信用」
 - (c) 仮空資本論に向けて
 - (3) 「信用と仮空資本」と利子つき資本
 - (a) 利子つき資本と仮空資本
 - (b) 信用制度と仮空資本
 - (4) 仮空資本なる概念の内容
 - (a) 銀行とは何か(1)
 - (b) 銀行とは何か(2)
 - (5) 仮空資本についての小括……………

……………以上本号

6. 仮空資本論への接近

(1) 仮空資本論への基本的姿勢

仮空資本について、以下に述べようとするこの結論を、予め先取りして示しておくことが理解の便宜であると思う。

利子つき資本は、信用制度の下において、〈(現実貨幣による)貸付可能資本を信用貨幣で貸す〉ことの中に認められるが、この貸付可能資本は、社会的資本として形成され、したがって自立性と仮空性とを表裏して帯びざるをえないものであって、すなわち貸付可能資本は仮空性をもって形成されざるをえないのである。したがって、その由来するところ、立脚するところに着目すれば、信用制度が再生産に基礎づけられることにおいて成立するものであるがゆえにこそ生ぜざるをえない、利子つき資本の仮空性の逆説が認められるのである。これをやや手短かに言えば、即ち、利子つき資本における仮空性の認識こそ、言うところの仮空資本論の中心眼目でなければならない。そして、仮空資本論において初めて、再生産と信用制度との逆説的關係が包括的明示的に語られうるのである¹⁾。

しかし、従来の仮空資本論の研究方法は、こうした認識に到達する道を自ら閉す性格のものであったように思われてならない。すなわち、従来の仮空資本論の研究は、『資本論』における諸用例を抜き出して列挙し、分類し、異同を指摘するといったものが多かった。けれども第3巻第5節のこの箇所は、かりに、エンゲルスによる編集の手が入る前の、マルクスの草稿について見たとしても、それは、いわば未定稿であり、完成に至るま

ではなおかなりの取捨と補筆がなされえた筈の、完成度の低い部分であるから、従来のような検討方法に果して耐えうるものかどうかには疑問がある。恐らく、現行『資本論』も、そこまで行き届いた整理がなされた上での論述ではあるまい。また、事実、章題としてまで掲げられている「仮空資本」であるにも拘らず、これについての定義めいた叙述は、どこにも与えられていない。だから、少なくとも、全体としてのコンテクストを無視して、文章の一部を切り離してその意味を自分本位に取る「断章取義」の弊は、なんとしても避けられねばならない。換言すると、原典の一語一語の字義について読むというより、体系の全体に思いを及しつつ全文脈を読み抜いてゆくこと、全体としての理論体系に思いをはせながら再構築をはかることが、この場合むしろ求められているのである。従来の読み方からの解放こそ、まず第一の課題である。したがって、小稿は、原典の片言隻句に形式的に首尾整合する定義を見出すことよりも、『資本論』が追い求めたものが何であるのか、何を問題にしようとしたのかを考えつつ、内容的に充実し、かつ理論的に一貫した理解を得るための筋道を探ることに主力を注ぐものとなっている。

いま求められているのは、太筆で描かれた仮空資本論である。そしてまた、章題にまで掲げられていることからして、もし仮空資本論なるものがあるとすれば、それは第25章以降のひとつの全体であり、その全体にてらして仮空資本概念は設定されるべきである。しかも、内容的に見て、それは利子つき資本の根本に立ち帰りつつ、利子つき資本に匹敵する重みをもった根本的集約的概念として設定されるべきものである。

『資本論』の著者は、恐らく、「利子つき資本論で信用制度論を書く」ことを試みたに相違ない。それはまた、古典派信用論を、利子つき資本なる座標軸をもって位置づける試みでもあったであろう。であるとする、と、「信用と仮空資本」は、「利子つき資本論で信用制度論を書く」試みの所産であろう。それは、恐らく、利子つき資本そのものが仮空資本たらざるをえないこと、したがって仮空資本は、利子つき資本の本性と絡めて説かれる

べきこと、を、意味するものであるに相違ない。

もとより、『資本論』に先んじて、仮空性を指摘した論者は多い。しかしそれは、あれこれの部分についての仮空性の指摘にすぎなかった。部分的断片的偶発的な仮空性がここでの問題なのではない。論じられるべきは、総体的根源的必然的な仮空性である。つまり、〈再生産に基礎づけられるがゆえの仮空性〉でなければならない。

すなわち、いまここで言いたいことは、「利子つき資本論で仮空資本論を読む」ことの必要性である。利子つき資本論にてらして仮空資本論を読むことが試みられなければ、真の読解には至りえないのではないか。前稿においては、「利子つき資本論で信用制度論を読む」ことを、「貨幣資本と現実資本」について試みたのであるが、それをここでは、いまひとつ大きなスケールで、仮空資本について試みてみようというのである。それは、利子つき資本の論理が、信用論の全ての枝葉にまで遍く行きわたっており、利子つき資本論とのひびき合う交信関係を問うことなしには、信用論の真の読解はありえないとする立場に立つことを意味している。それは、合せ鏡の他方から見れば、信用理論全体の礎石としての利子つき資本概念の地位を再確認する試みにほかならない。

(2) 「擬制的貸付資本」としての仮空資本 理解について

(a) 「擬制的貸付資本」

ところで、本論に入るまえに、仮空資本を「信用貨幣による貸付」と解し、これをもって「擬制的貸付資本」＝仮空資本とする解法があるので、自戒の意味も込めて、これについて触れておきたい。

すなわち、〈現金による貸付取引〉をもってほんらいの利子つき資本と考え、これと対比した意味で、〈信用貨幣をもってする貸付取引〉を「擬制的貸付資本」、短かく言って「擬制資本」、つまりは「仮空資本」と呼ぶ整理の仕方である。それはまた、自己宛債務を貸すという点で、高利貸と区別されたものとして、近代的銀行制度・信用制

度を特色づけようとする考え方でもある²⁾。

この思考は、①信用貨幣、と、②貸付資本という2つのエレメントの接合のうえになりたっている。しかし、ここに合算されているそれぞれの要素の理解について、重大な問題がひそんでいる。

第一に、言うところの信用貨幣は、現金と切れた存在になっている。そこで理解されている信用貨幣は、信用連鎖の網の目に沿って、宙空に浮ぶ存在になっている。したがって、貸付とは言っても、利子が問題にされることがない。

第二に、貸付取引ないし貸付資本とは言っても、たんに日常的経験的レベルで知られているというにすぎず、再生産とのかかわりのない〈根無し草〉の概念になっている。

第三に、そのさい、「擬制的貸付資本」は、〈信用貨幣による貸付〉として、〈現金による貸付〉と対比されるのであるが、この〈現金による貸付〉という対極にある概念についても、その「現金」がどこから来たのか、「貸付資本」が再生産とどう関わるのかは不明のままに置かれている。

(b) 「商業信用と銀行信用」

仮空資本を「擬制的貸付資本」としてとらえる考え方の背後には、信用理論の根幹を利子つき資本においてではなく、むしろそれを回避したかたちで、〈商業信用と銀行信用〉としてとらえる手法がひそんでおり、ここにも危うい部分がある。

第25章「信用と仮空資本」に相当する箇所を「商業信用と銀行信用」と読みかえるこの考え方の底には、〈古典学派で『資本論』を読む〉スタンスに近いものがあるが、その結果、利子つき資本論は意味のない、形だけの祖述に終わってしまう。では、どこに問題があるのか。

第一に、信用制度上のひとつひとつの概念が、単純に一貫した連続的なものとして理解される傾向がある。例えば、銀行信用とは、つまるところ商業信用に帰着するもの、とされる。或いは、銀行自己宛債務の流通とは商業手形の流通であり、それは直ちに商業上の信用連鎖であるとされる傾向がある。個々の概念の論理的な刻みが無視され、半ば意識的に竹の節が抜かれてしまう。では、な

ぜ、そうなるのだろうか。

第二に、そうした形の〈商業信用と銀行信用〉論におわるということは、そこに古典学派的な、無矛盾性があるからだ。ここで注目すべきは、古典学派には、概念としての資本がなく、またこれと特に区別されたものとしての利子つき資本がないという点である。〈商業信用と銀行信用〉論が、ともすると信用秩序というものを、静的な、定常状態にあるものとしてとらえる根本のところには、資本概念の欠如がある。ほんらい的に経過的で過程的な運動体としての資本概念こそは、全体系にダイナミズムを与えるはずのものである。とりわけ、直接的生産過程を掌握するほんらいの資本とは区別された、利子つき資本の認識の下に、信用制度を位置づけることがないかぎり、信用制度は再生産ときりむすぶことがないから、信用論は無矛盾の体系に終らざるをえないのである。

そこに残るものは、現金は〈実〉であり、信用貨幣は〈虚〉であるという、貨幣における〈虚実〉の弁別にすぎない。〈貸付手段たる貨幣の、価値実質の有無〉が、仮空性＝擬制性の存否を決め、金貨幣で貸せば〈実〉、紙券通貨で貸せば〈虚〉、というだけのことなら、それは貨幣流通の場ですでに言うことであって、なにも貸付の場まで持ちこさねばならぬ理由はない。

改めて言えば、こうした「擬制的貸付資本」論は、もっぱら静謐を誇り、安寧を旨とするだけの信用論に終らざるをえない。すなわち、端的に言うと、「擬制的貸付資本」としての仮空資本理解は、問題展開の場を、古典学派の思考世界に求めようとするもののように思えてならぬのである。

(c) 仮空資本論に向けて

しかし、「擬制的貸付資本」論の主張するところを、たんに封じればよい、ということではない。^た質さるべきはなにか。そして、積極的な意味で、仮空資本論は、どうあるべきなのだろうか。

それは、〈利子つき資本の仮空性〉の指摘にあると言わねばならない。そして、〈(現実貨幣による)貸付可能資本を、信用貨幣で貸す〉という場合の、〈(現実貨幣による)貸付可能資本〉そのもの

が既に〈虚〉であることの認識が重要な意味をもつ。それは、第一に、利子つき資本の最終拠点の仮空性を示すことにおいて、利子つき資本の仮空性が明らかとされるからであり、第二に、〈(現実貨幣による)貸付可能資本を、信用貨幣で貸す〉という立体的機構において金融流通を包括的に問題とすることにより、〈信用貨幣で貸す〉ことが、反転して、〈(現実貨幣による)貸付可能資本〉の質・量を規定するものであることが示されうるからである。

さらに言えば、この最終拠点たる〈(現実貨幣による)貸付可能資本〉こそは、その出自の由来において、まさに社会的再生産の生み出したもの、その意味では〈実〉の存在が生んだ仔である。したがって、再生産に依拠し、再生産に規定されるがゆえにこそ生ぜざるをえない仮空性の逆説が指摘されねばならないのである³⁾。

事柄の眼目は、次の点にこそある。利子つき貸付資本は、再生産をおりなす個別諸資本の共同行為の所産、換言すれば、社会的再生産の「創造物^{つくりもの}」だという点の認識にある。〈信用制度は、産業資本の創造物だ〉という言葉には深い意味が込められている。〈つくりぬし〉は、社会的再生産である。社会的再生産こそが、そもそもの本体である。そういう意味で、利子つき貸付資本は、ほんらい的に、自らの足で立っているわけのものではない。論理的に見れば、利子つき資本とは、〈つくりぬし〉たる資本が造り出した、自らの〈似姿〉にほかならない。その出生について、機構的にこれを見れば、出自の由来は社会的再生産からの「無内容なる貨幣沈澱」に発する。利子つき資本の自足性、自立性は、社会的再生産によって与えられた、仮りのものにすぎない。それは、社会的資本としてのみ形成されうるものだからだ。あらゆるものから独立に、何にも依存することなしに、利子つき貸付資本が存立しえているわけではない。もとより、その独立性、自立性、非依存性が認められるからこそ、利子つき資本なる独自の名称が与えられ、範疇化されている。しかし、その独立性、自立性、非依存性は、仮りのものにすぎぬ。社会的再生産の〈創造物^{つくりもの}〉なのだから。いま一步だけ、

ふみ込んで言えば、利子つき貸付資本は、所有についてのほんらい的基礎を直接的には持ちえない。社会的再生産の〈創造物^{つくりもの}〉として、近代的信用制度の下で、社会的資本として形成されて機能するというにすぎない。また、その機能としても、論理的前提として産業資本の営みを必要とし、機構的にも社会的再生産を必要とする。利子つき貸付資本は、全き意味において自らの足で立っているわけのものではなく、したがって、社会的資本としての自立性の反面において、その仮空性が指摘されねばならぬのである。

かくて求められるべきは、「古典学派で『資本論』を読む」ことではない。逆に、『『資本論』が古典学派をいかに位置づけたか』が知られねばならぬのである。

- (1) 用語について一言。以下では、fiktives Kapital の訳語として、「仮空資本」、「擬制資本」の両者を同じ意味内容のものとして使用する。
- (2) 資本制生産の下における近代的信用制度の特質を、もっぱら〈信用貨幣〉において、或いは〈信用貨幣を貸す〉点において見出そうとする一方の主張に対比してみると、『資本論』は、近代的信用制度の特質を〈利子つき資本〉においてとらえようとしている。〈利子つき資本〉においてと、ここで言う意味は、資本制再生産が自らの運行のために必要とする一条件としての信用制度を自らの運動の中で作り出す、その信用制度の中心を貫くものとしての利子つき資本、という意味である。利子つき資本というカテゴリーは、再生産とは別個無縁の、時空を超えて存在しうる貸付資本、という意味のものではない。再生産によって規定され、基礎づけられ、しかもその故にこそ逆説的關係に立たざるをえないものとして、〈利子つき資本〉概念は理解されねばならない。その意味で、近代的信用制度は、利子つき資本において特色づけられ、その特色は利子つき資本の存在から説かれねばならぬのである。
- (3) 現実貨幣による直接預金こそは、〈再生産に立脚する〉ものとしての信用制度を機構的に理解するに際しての第一の鍵である。のちにも述べる通り、それは、再生産が発汗する〈無内容なる貨幣沈澱〉を信用制度が受容する際の必然的な取引形式である。すなわち、この法的取引形式は、再生産に立脚するものとしての信用制度を支える経済的連関を内容としている。

その意味で、〈現金を貸す〉のが前期的高利貸、〈自己宛債務を貸す〉のが近代的銀行、と言うわけにいかない。問題は、その〈現金〉が、再生産の外部に偶々存在したというに止まるか、それとも再生産の内部から、再生産の過程的運動の必然的随伴現象として反復的恒常的に生じてくる〈無内容なる貨幣沈澱〉であるか、にある。つまり、ここ

て言えば、再生産の進行の必然的随伴現象であるということ、このことの意味は、信用制度の由来するところを解く上で、決定的な意味を持っている。であればこそ、第25章で預金が問題として取り上げられ、貨幣取引業とのかかわりが問われてくるのである。

(3) 「信用と仮空資本」と利子つき資本

かくて、仮空資本という概念は、何よりもまず、利子つき資本との関連において説かれるべきものである。二枚の合せ鏡のように、利子つき資本と仮空資本とは、対照させつつ考察されるべき概念である。

(a) 利子つき資本と仮空資本

まず、利子つき資本の側から問題を見ておこう。利子つき資本論の冒頭第21章を思い起してみよう。その端初冒頭の論述は、〈利子つき資本も、ほんらいの資本と同じく、資本である〉ことを言うためのものではない。〈あれも資本、これも資本〉という漫然たる論述では決してない。それは、(1)利子つき資本は〈ほんらいの資本ではない〉こと、(2)しかし、にも拘らず、〈利子つき資本も、ほんらいの資本ではない、資本である〉こと、この2つのことを背中合せに述べようとするものである。〈あれも資本、これも資本〉という散漫な認識とは違って、このあたりの論理の刻みはとくに厳しく、かつ入念である。論理の限りを尽して、事実における屈曲をフォローしようとしている。

であればこそ、利子つき資本は、〈ほんらいの資本ではないにも拘らず、いかにして存立し、いかにして資本たりえているか〉が問われてくる。ほんらいの資本ではないにも拘らず、資本として、いわばほんらいの資本の〈似姿〉として、資本世界の一劃に位置を得て、機能しつつある、その理由が知りたい。利子つき資本が、現にわれわれの眼前において、事実として、資本世界に不可欠の要素として機能しつつあることを、われわれは知っている。ほんらいの資本ではない筈のものが、いかにして生れ、資本たりえているのか、この問いこそが、第21章冒頭の叙述を必要とした。

ここで重要なのは、利子つき資本が、ほんらいの資本ではない、という認識である。くりかえし

て言うが、利子つき資本は、直接的生産過程を包摂しつつ利潤を追求するほんらいの資本ではない、という認識が重要なのである。すなわち、利子つき資本は、ほんらいの資本に「擬えられた」資本であり、ほんらい的に「資本擬き」なのである。「擬き」にすぎぬものが、何故に、如何にして、資本世界の一劃に位置を占め、存立し、機能しているのか。第21章冒頭の論述についてのこの読解こそ、第25章以降における仮空資本論を解き明す鍵である。

「擬き」としての「(利子つき)資本」というこの背理、この背理は、信用制度という機構を必然とし、信用制度なしに、この「擬き」は成立しえない。「擬き」である限り、利子つき資本は影にすぎぬ。しかし、その影が実在し、現実機能しつつあることは、まぎれもない事実である。したがって、信用制度論とは、この「擬き」としての「(利子つき)資本」を存立せしめている具体的機構を解明することをもって、その第一義の目的とするものでなければならない。そして仮空資本論とは、つまるところ、利子つき資本が必然的に随伴せざるをえないその仮空性を解きあかすことをもって内容とする。利子つき資本の「擬き」性が、仮空資本性を必然とするからである。

くりかえして言えば、〈あれも資本、これも資本〉であることを言うだけのことであれば、そもそも利子つき資本論など不必要である。利子つき資本におけるこの弁別の観点の重要性は、つまり、視点をかえて言えば、再生産の内と外とを厳しく区別して認識することに通じる。そのことが次の問題である⁴⁾。

(b) 信用制度と仮空資本

そこで次に、同じことを、いさ少し内容的に、再生産と信用制度との機構的関連に即して考えてみよう。

利子つき資本が、ほんらいの資本ではなく、つまりは「資本擬き」だということは、それが再生産の外部に位置するということを意味する。しかしそれは、確かに外部的存在ではあるが、偶然的な存在ではありえない。偶然的存在を再生産が機

構的恒常的反復的に利用することはありえないからだ。利子つき資本は、確かに再生産の外部に位置するものではあるが、再生産と無縁の偶然的な存在なのではない。利子つき資本は、再生産の内に由来する外在者なのである。

つまり、利子つき資本は、再生産の外部に位置するものではあるが、その出自はあくまで再生産にある。その出生の由来は、再生産から説かれねばならない。利子つき資本は、inside money を基礎としてのみ生成するものであり、つまり内部に由来するものであるがゆえに、信用制度において社会的資本として形成されるほかに、社会的資本としての自立性を獲得するとともに仮空性を帯びざるをえない筈のものであって、したがってそれは仮空資本としてしか存在しえないものなのである。すなわち、これをつづめて言えば、再生産という〈実〉に由来するがゆえに必然的に〈虚〉たらざるをえないという、この逆説こそが、仮空資本論の真の内容である。

すなわち、利子つき資本の基体となるべき貨幣は、再生産それ自体が発汗する「無内容なる貨幣沈澱」を措いてほかにはない。もとより、個々の「無内容なる貨幣沈澱」そのものは、自立性をもちえない存在であるから、利子つき資本たりえないことは明らかである。この「無内容なる貨幣沈澱」を受容して利子つき資本なる独自の存在にまで、つまりは貸付可能資本にまで練り上げ、自立的存在にまで化成する機構こそ、信用制度にほかならない。信用制度の下において初めて、「無内容なる貨幣沈澱」の中から、社会的資本としての〈自立性〉をもつ貸付可能資本が化成される。が、しかしまた同時に、社会的資本なるがゆえの〈仮空性〉を帯びざるをえないのである。したがって仮空資本なる規定性は、ここに生じる貸付可能資本の社会的資本としての〈自立性〉の、いわば反省規定なのである。

以上のような意味で、利子つき資本は信用制度の存在と機能とを論理上の前提とするものであり、利子つき資本は信用制度においてのみ形成される。そして叙上の経緯からして、仮空資本においてのみ利子つき資本は存在する。かくて、仮空資本は

利子つき資本の本性から説かれるべきものであり、利子つき資本は仮空資本たらざるをえないのである。

いま、さきに前稿において述べた、貨幣資本蓄積の逆倒性とからめて考えてみると、ここに、〈倒立虚像〉性とも称さるべき現象が観察されることに気付くのであるが、古典学派は、これを正立せる実像であるかに説いた。それは、利子つき資本を再生産の内なる存在と考え、或いは内外の弁別を怠ったがために生じた錯誤である。

(4) 仮空資本なる概念の内容

仮空資本論そのものに、さらにふみ込んでみよう。

さきに述べたことをくり返すと、利子つき資本は、利潤を追求しつつ存在するほんらいの資本世界の内部において、直接無媒介に生じる性格のものではありえない。ほんらいの資本世界の外部において、つまりは再生産の外側において生じるしかないのではあるが、しかしまた、ほんらいの資本世界、つまりは再生産の内部に由来し、これに基礎づけられるのでなければ体制的恒常性を持ちえない。かくて利子つき資本は、再生産の外部において、社会的資本として生じる以外に道はない。そして、この社会的資本としての〈自立性〉が可能とされるとき、同時にそこには、社会的資本なるがゆえの〈仮空性〉が付着せざるをえないのである。自立的存在としての利子つき資本を得ようとすれば、必然的に生ぜざるをえない仮空性、こうした仮空資本の内容に具体性を与えるため、以下では銀行の規定とからめたかたちで、改めて問題の中味にふみ入ってみたい。従来、銀行の定義として述べられてきた議論の中に、貸付可能資本の理論は埋れており、したがってその検討は、仮空資本について考えるさいに、重要な示唆を与えるものだからである。ただし、ここでは、銀行の定義を手がかりとして、仮空資本論を深めようというのであって、銀行の定義そのものを直接にとりあげて問題にしようというのではないことを予め留保し、付言しておきたい。

(a) 銀行とは何か(1)

『資本論』は、銀行は「自分の手元に預けられた貨幣を現金で前貸する場合」にも「信用を取扱う」と言う。つまり、現金で前貸する場合にも、その貸付可能資本は仮空性を帯びると言うのである。ここでは、まず「(現実貨幣による) 貸付可能資本を」貸す、という次元で考えてみよう。

リカード (D・Ricardo) はいう。「銀行業と他のすべての事業とのあいだには、次のような重要な差異がある。もし銀行が自分自身の資本の使用によって獲得する利潤のほかにはなんらの利潤も得ることがないならば、銀行はけっして設立されないであろう。銀行の実質利益は、銀行が他人の資本を使用するときにはじめて生ずる。これに反して、他の諸事業は、自分の資本のみを使用することによってしばしば大なる利潤をあげる。」(David Ricardo, *Proposals for an Economical and Secure Currency*, 2nd ed. in *The Works*, ed. by P. Sraffa, p. 108 リカードウ『経済的でしかも安定的な通貨』, 全集IV, 雄松堂, 126頁) また、これをうけて、バジヨットは言う。「『銀行家独特の機能は、彼れが他人の資金を使用するや否や始まる』とリカードは云って居る、彼れが彼れ自身の資金を使用している限り、彼れは単に資本家たるに過ぎない。即ちロンバード街の凡ゆる銀行は (ビル・ブローカーは此の点では銀行家の一種たるに過ぎない) 他の人々に属する多量の資金を当座勘定として (on running account), 又預金として (on deposit) 保有して居る。」(Walter Bagehot, *Lombard Street*, in *The Collected Works*, ed. by Norman St John-Stevens, IX. p. 58 宇野弘蔵訳『ロンバード街』, 岩波文庫, 31頁)。

以上のような、リカードないしバジヨットの観点というものは、自分の貨幣を貸すのか、他人の貨幣を貸すか、の二者択一にある。しかし、この二者択一の問題のたて方そのものが問題だ。銀行は、個別に預った貨幣を個別に貸すのではない。もちろん、リカードにしろバジヨットにしろ、自分の貨幣を貸す高利貸と区別して、他人の貨幣を貸すものとして銀行をとらえようとしていることそれ自体は決して間違いではない。しかし、或る

個人の貨幣を預って貸すのは銀行ではない。銀行は、社会的再生産に基礎づけられた社会的機関として、不断に流出入する諸々の個別の預金の中から、社会的資本としての貸付可能資本をつくり出す。そのためには、社会的な規模で、また經常的に預金を集積するという点に決定的な意味がある。

いわゆる信用媒介 (Negotiation of Credit, Vermittlung von Kredit) 説における根本問題のひとつがここにある。その古典的主張者たるギルバート (J. W. Gilbart), リーフ (W. Leaf), シュルツェ・ゲファーニッツ (Schultze-Gävernitz) らの名と結んで知られる考え方である。この信用媒介説の論者の主張全体を通じて言えることは、かれらにあっては、〈不特定多数の〉預金者からの〈不断の〉預金流入・流出ということそのものが全く理解されておらず、したがって、個別の預金とは区別されたものとしての貸付可能資本の析出に至っておらず、したがってまた、その社会的資本としての特性が理解されていないということである。

だから、銀行をもって、「預金取扱機関」とする¹⁾とらえかたには、通常考えられているような制度的法制的な理解を越えて、事柄の経済的に本質的な部分において、極めて深い意味がある。したがって、銀行の営む預金取引の中核たる直接預金は、ほんらい、再生産の生み出す「無内容なる貨幣沈澱」を受容するための取引形式として、その経済上の機能から説明されるべきものである。ここで注意を喚起しておくべき点が2つある。

第一に、社会的なひろがりをもつ〈不特定多数からの〉、〈不断の〉預金の流入と流出が「相殺」される中から、預金の底だまりと俗称される遊離貨幣部分が生じ、これが他用可能資金として、それなりの〈自立性〉をもつに至ることが注目されねばならない。これこそ、社会的資本としての、つまり誰のものでもない、貸付可能資本なのである。ここに、私的資本主義的分散的所有という枠組みの根幹を温存し、傷つけることなく、その枠組みの内部でしかもその枠組みを越えた自立的な性格の資金が形成されるのである。

第二に、預金取引の展開とは、保管寄託から消費寄託への取引の内実の変化を伴うものであるが、

これは、再生産の内側での貨幣取引が、貸付可能資本の形成と利子つき資本運動の開始とともに、質的に転変を遂げる経緯を示すものである。再生産の内部における貨幣取引に由来しつつ、再生産の外側に位置する利子つき資本を形成するに至る信用制度の機構上の特質を反映するものとして重視されるべき側面である。

さて、このように考えてみて改めて痛感させられることは、利子つき資本という概念が、再生産の外側に位置するものでありながら、再生産に深く執着することなしには成立しえない概念だということである。すでに記したように、貸付可能資本は、一方では社会的資本として〈自立的〉存在たりえているのであるが、しかし同時に他方では、あくまでも再生産に由来し、したがって私的資本主義的分散的所有の枠組みを背負った存在であり、つまりは預金債務に由来する存在であるから、その限りでの〈虚構性〉ないし〈仮空性〉を帯びざるをえない。何らかの事態の急変によって、預金が急激かつ集中的に引出され、流入のテンポが遅れるときには、貸付可能資本も幻のごとくに消え去ってしまう。社会的資本としての〈自立性〉をいかに賞揚したとしても、それはまさにうたかたの存在、幻のごとき存在、掌に掬いあげた砂のごとき存在なのである。くりかえせば、貸付可能資本の社会的資本としての〈自立性〉とは言うものの、それは、いつもろくもくずれ去るかも知れぬ仮の存在として、〈虚〉にして〈仮空〉の性格を含むものであることが同時に認識されねばならない。そしてそれも、再生産という〈実〉の世界に基礎づけられているがゆえに生ぜざるをえない〈虚〉の世界として、逆説的に認識されるべきものなのである。

なお、しかし以上のところでは、〈(現実貨幣による) 貸付可能資本を〉、〈信用貨幣で〉貸す、というさいの後半部分の問題——つまり〈信用貨幣で〉貸すという点は未だ取り上げられていない。次に、〈信用貨幣で〉貸すことが、〈(現実貨幣による) 貸付可能資本〉の維持・形成に、どのように関わるかを考えてみよう。

(b) 銀行とは何か(2)

さきに記した、リカードやバジョットのような考え方とは別に、銀行は自己宛債務を貸すものとして概念化される場合がある。例えば、セイヤーズ (R. S. Sayers) は、銀行とは、「その債務が他の人々のあいだの債務の決済において広く受領されるところの機関」(『現代銀行論』, 邦訳, 3頁) であるという。

こうした信用貨幣造出機能を、無限定的に絶対化し、その現金基礎から切り離して自己完結的に理解しようとするものが信用創造 (credit creation, Kreditschöpfung, Kreditschaffung) 説である。マクラウド (H. D. Macleod), シュムペーター (J. A. Schumpeter), ハーン (L. A. Hahn), フィリップス (C. A. Phillips) らの主張するところであって、例えばマクラウドは、「銀行用語においては預金 (deposit) と発券 (issue) とは同一物」と断言し、預金設定による貸出を銀行業務の中心にすえ、「銀行および銀行家の本質的な、他と区別されるべき特質は、要求払の信用を創造し、発行することである。そしてこの信用たるや、流通に投ぜられ、貨幣のすべての機能を果すものと期待される。したがって銀行は、貨幣を借り・貸しする店舗 (an office for borrowing and lending money) ではなく、信用の製造所 (manufactory of credit) なのである」と結論する。(H. D. Macleod, *The Theory and Practice of Banking*, 6th ed., 1902, vol. I, pp. 330, 324-6)。

ここでは信用創造学説の当否についての学説史的検討は措く。その個々の論者における主張は極めて多様であり、また、信用制度の能動的積極的機能を強調するものが多いとはいうものの、A. Smith におけるような銀行信用通貨による貸付のもつ再生産順応力を説くものと通底する側面をも持つのであって、概括的に論じることは困難である。

もちろん、銀行を「通貨 (信用通貨) 造出機関」だとするこの考え方は、金融機関一般の中における銀行の特色を明らかにする識別指標として、極めて重要であり、実際にも有用であることは疑いない。けれども、ここでの問題は、銀行が〈信用

貨幣で貸す〉ことが、たんにそれだけのこととして理解されればよいのではなく、〈信用貨幣で貸す〉ことが反転して、〈(現実貨幣による)貸付可能資本〉の維持・形成にかかわっているという点に理解が及ぶのでなければ意味がない、という点にある。

すなわち、銀行による信用通貨の造出による貸出は、二重の意味を持つ。第一に、信用通貨が流通の手段となり、貸付手段化することの全ては、再生産をおりなす個別諸資本の所作に帰さるべきものであるが、第二に、であればこそ、この信用通貨で貸すことは、現実貨幣による貸付可能資本の維持・形成に資する作用をもつ。

即ち、第二の点を端的に言えば、代用貨幣たる信用通貨が、信用通貨として社会的に認知されるのと同時に、現実貨幣による貸付可能資本にも、新たな意味での社会的性格が付与されるのであり、であればこそ、この信用通貨の信用に疑義が生じ、つまりは社会的認知性を失うときには、現実貨幣への一斉転換が求められるであろうから、現実貨幣による貸付可能資本もその社会的基礎を失い、もろくも崩れ去ることになるのである。

つまり、信用通貨の流通そのことが、本来なら現金の流通すべきはずの取引を、無体化し無現金化することによって、銀行の手元における〈(現実貨幣による)貸付可能資本〉の維持・形成に資する。それは、維持・形成される貸付可能資本の量に作用するのみならず、質においても、銀行信用通貨の流通として集約されるかぎりでの取引の社会的組織性を反映し、そのことにより、〈(現実貨幣による)貸付可能資本〉に、新たな意味での社会的資本性が加味され、したがってその〈自立性〉にも、また〈仮空性〉にも、新たな意味のものが加重されるのである。

叙上のような視角が、金融理論・信用理論において持つ意義は極めて大きい。今日、通貨供給が、金融流通を介してのみ行なわれるということの意味は、十分に検討されねばならぬ。ここで注目すべきは、金融流通の機構であり、銀行制度の立体的機構である。もとより、銀行信用通貨の供給にしろ流通にしろ、たしかにそれ自体として見れ

ば、貨幣論ないし信用貨幣論の論理次元の問題にすぎない。その論理次元で取扱うのであれば、それは、①貨幣節約、②貨幣の流通速度、③信用貨幣の流通根拠、などの問題として解析することが可能であろう。そして、それはそれで十分に意味があり、また理論構築において、不可欠の分野である。けれども、もし、その際に、銀行信用通貨の造出・貸付・流通が、同時に反転して、〈(現実貨幣による)貸付可能資本〉の維持・形成と深く結びついたものであることが見失われるならば、金融流通の機構そのものが見失われることを意味しよう。これは、金融流通の根幹の理解にかかわる。〈金融流通なき金融論〉、〈利子論なき信用論〉へと向いかねない岐路がそこにはある。さきに触れた「擬制的貸付資本」論は、ともすると〈金融流通なき金融論〉へと傾斜しかねない性向をもつもののように思える。

さて、以上、(a)(b)を通じて確認されたことは、現実貨幣による貸付可能資本の維持・形成が、その根本のところ、銀行との間にとり結ばれる寄託的信用関係を基礎とするものである、ということであった。すなわち、銀行の営む寄託取引——〈預ける・預かる〉という貨幣的信用に関する取引——に伴って生じる債権債務関係への着眼の重要性である。それは、〈貸す・借りる〉という貸借的信用に伴う債権債務関係とは、厳重に区別されるべきものであって、ほんらい的には貨幣取引業に内属する取引、すなわち再生産内部における取引である。

(a)で見たのは、もっぱらこの寄託取引が相務的な場合——つまり、現金を預ける・預かることで生じた寄託的債権債務関係、であるのに対し、(b)で見たのは、もっぱら片務的なもの——つまり、現金を預ける・預かることなしに、例えば預金設定(deposit creation)のような方式で、すなわち自己宛債務で貸すことによって生じた寄託的債権債務関係、である。

しかし、(a)について言うと、再生産の〈揺らぎ〉によって、現金の預入・払戻の間の相殺関係が定常的でなくなることに発して、銀行との間に寄託

的信用関係をとり結ぶことそのものへの不信が生じて、全てが崩壊することが懸念されるし、(b)について言うと、再生産内部における取引ネットワークの〈揺らぎ〉を反映して生じてくる、銀行信用通貨の化体する寄託的信用関係への疑念から、全てが崩壊し去ることが危惧される。

すなわち、信用制度は、再生産を集約しつつ、社会的資本としての性格を軸として、利子つき資本を再生産の外部に生ぜしめた。その限りでいうと、利子つき資本は、独立性ないし非依存性を持つ外在的超越者として機能する。しかし、それは、再生産総体の〈揺らぎ〉によって、その社会的資本性の動揺を来たし、その〈自立性〉を危くし、〈仮空性〉を露わにせざるをえないのである。

そして、いうところの「預金者保護」の重要性とは、預金者の身辺^{のう}囊中をおもんばかってのことではなく、預金という寄託取引に疑義が生じた時には、社会的資本性そのものが揺らぎ、利子つき資本を軸とする信用制度の全体系の崩壊が危惧されるからにほかならない。

かくて、社会的資本性を帯びる貸付可能資本を創出することで、利子つき資本は、自主自立の自由の天地を得たかに思え、また福の神の地位に思えるのであるが、しかしそれは、その由来するところ、つまりは再生産の内部における貨幣流通のあり方、言いかえれば inside money のあり方に依存し、規定されざるをえないのであって、再生産内部における有体的現金流通を伴う取引領域の比重変化には、敏感に反応せざるをえないのである。

社会的資本としての〈自立性〉は、常に〈仮空性〉を随伴する。信用制度の内在的不安定性のよってきたる根源はここにある。それは、資本主義的所有の枠組みの中で、この枠組みを維持温存し、これを傷つけることを避けつつ、これを超克しようとする背理の試みの表現である。そしてそれは、再生産によって、再生産のために、再生産の外側に生み出された利子つき資本の、生来の背理性であった。〈仮空性〉のもつ根源的性格が認識されねばならない。

(5) 仮空資本についての小括

従来の研究史をふりかえってみると、仮空資本について、幾通りもの解釈が存在する。

(1) 〈信用貨幣をもってする貸付取引〉＝擬制的貸付資本＝擬制資本とする解釈。

(2) 預金の仮空化・名目化、すなわち預金の背後にある準備金の比重が低位のものにすぎないことに着目するもの。

(3) 利子つき資本に対する請求権の蓄積としての名目的貸付資本＝貸付けられた貸付資本＝貸付債権＝貸付残高、に着目するもの。

(4) 総体としての銀行資本の仮空性に着目するもの。

(5) 証券流通機構なり証券価格機構にもつばら着目して、証券擬制資本に収斂させて理解するもの。

しかし、上記のいずれも、部分的な概念設定、ないし消極的な概念設定に止まるもののように思えてならない。小稿で示した解釈は〈利子つき資本そのもののもつ仮空性〉に焦点をあてたものとなっている。

利子つき資本こそは、第3巻第5篇のなかの最も根源的積極的攻撃的な概念である。仮空資本は、まさにこの中心概念にかかわるものとされねばならない。仮空資本とは、利子つき資本の「姿」にほかならない。そして、「信用と仮空資本」とは、利子つき資本が、資本「擬き」なるがゆえに、信用制度の下における仮空資本としてしか存立しえぬものであることの謂なのである。ここに、〈(現実貨幣による) 貸付可能資本を、信用貨幣で貸す〉ものとしての利子つき資本の総体としての仮空性が、その根底から論じられることになった。

こうした観点から仮空性を理解することが従来行なわれなかった理由はどこにあるか。従来、利子つき資本を再生産とのかかわりでとらえるという思考回路は、閉されてきたのではないか。利子つき資本は、再生産にとって直接的には外在者として存在し、機能する。外在者としては given である。しかし、この〈外部にあるもの〉としての利子つき資本の理解、つまり〈再生産の内外の

弁別〉についての自覚的認識において、すでに欠けるところがあったのではないか。ともすると、信用理論だから信用を取扱うのは当然であり、金融理論だから金融を問題にするのだとされて、疑うところがない。信用なり金融なりがギブンとされて、それ自体の理論体系上の位置や意味は、とりたてて問題とされることがない。つまり、ギブンとされてはいるが、外在性がそれとして自覚的に位置づけられて認識されているわけではない。たんに経験的日常的なレベルで、例えば貸付という取引形式が知られ、これをギブンとして論じているにすぎない。

第3巻第5篇の当該箇所の発端において、まず問われるべきは、ほんらいの資本とは区別されたものであるにも拘らず、利子つき資本が存立し、社会的再生産と組み合わさって作動しえている根本的理由である。利子つき資本は、あくまでも「擬き」資本であり、しかるがゆえに再生産外の存在である。だが、「擬き」資本であるにしても、それは偶然的な外在者であってはならない。体制的恒常性が求められる。利子つき資本は、再生産の外在者ではあるが、その由来を尋ねれば、その源は再生産に由来し、これに規定された存在であることが知られる。利子つき資本は、再生産を信用制度が集約することにおいて造り出された外在者、である。再生産に立脚しつつ、外在するものとしての利子つき資本にかんする逆説の理解、これこそ仮空資本論の根底に求められるものであった。この逆説的關係こそ、抽象度を上げて見れば、いうところの物象化論の課題である。くり返すが、利子つき資本は、あくまで社会的再生産に、それもとりわけ再生産における内外の弁別にこだわったところで初めて認識される概念であり、これをふまえることによって、再生産に立脚するがゆえの仮空性が理解されるのである。〈実〉に基礎づけられているがゆえの〈虚〉という、この屈曲を理解する鍵は、再生産における内外の弁別にある。利子つき資本は、再生産の外にあるが、しかし再生産に規定された存在なのである。

つまり、こう言うことも出来よう。ひらたく言えば、再生産が、その必要とする条件を、日々の

自らの営みの中で、再生産の外部に造り出そうとしたのが信用制度である、と。しかし、これを、産業資本との関係において、「信用制度の必要性」、「有用性」として、つまりは〈役に立つもの〉としてのみ理解するとなると、産業資本の世界、再生産の世界とは〈順〉の関係をとり結ぶだけのことに終るであろう。信用制度という機構・制度・装置が、産業資本にとって有用なものとして形成され、存在し、機能するものであることは、まぎれもない事実である。しかし、それだけのことではない、というのもまた、重要な事実認識である。

つまり、問題のポイントは、信用制度を〈資本関係の外在化〉においてのみ生じるものとして認識しうるか否かにある。信用制度を貫くものとしての利子つき資本の論理の認識にある。この点を認識しなかった古典学派は、信用制度を、あくまでも従順に健全な装置であるかに考えた。〈正立せる実像〉においてとらえたのである。しかし、それは、比喩的な表現を借りて言えば、〈倒立せる虚像〉としても論定されるべきであった。再生産に立脚するがゆえに生ぜざるをえない仮空性、この逆説を理解せんがためには、〈資本関係の外在化〉において利子つき資本を理解することが不可欠とされるのである⁵⁾。

すなわち、以上では、利子つき資本を、信用制度の下に形成される貸付可能資本において見た。そしてその貸付可能資本を社会的資本ととらえ、社会的資本なるがゆえの外在性・超越性が有する〈自立性〉と〈仮空性〉とを表裏するものとして理解した。つまり、社会的資本としてこれをとらえることにより、再生産に由来しつつ、これを超えるもの、したがって〈自立性〉と〈仮空性〉とを併せ有するものとしてとらえたのである。そしてさらに、以上のような機構的制度的にくりひろげられた形で認識されたものを、論理的な範疇として凝縮したものこそ、「利子つき資本」にはかならない。第21章の極めて屈曲に満ちた論理的叙述は、そうした見地から大いに味識さるべきものである。

最後に指摘さるべきは、以上述べきったような意味における仮空資本を媒介として、資本関係

の外在化は推し進められる、という観点の重要性である。無内容化され、無媒介的自動物神と化するに至る〈資本—利子〉の論理を、機構的に媒介するものは、社会的に形成された〈創造物^{つくりもの}〉としての利子つき資本であり、換言すれば仮空資本でなければならない。ここに、〈資本—利子〉なる、外在化された資本関係に見守られることなしには再生産が運行しえぬという逆倒関係が全面的に展開される。しかし、それは、未だ小稿の範囲では遠望されるに止まる。金融過程の内容が未だ説かれていないからである⁶⁾。

(未完)

- (4) ここでは、利子つき資本論を、それとして展開しようとしているのではない。仮空資本論を整理するに必要な限りでの論述にすぎない。
- (5) 貨幣取引なる概念について一言しておきたい。貨幣取引なる概念は、あくまでも再生産内の概念であるから、再生産外に位置する利子つき資本とは、理論体系上の位相差をもつ。したがって、貨幣取引から延々と展開された直線の

延長上に利子つき資本があるという理解には、やや危いものがある。

いま、再生産の側から信用制度をにらんで展開していった場合、そのきわまったところで、潜在的に他用可能性をもつ資金の造出が認められるに違いない。問題は、これを、理論体系上の折り返し点、屈曲点として、どう処理するかにかかわっている。そこで新たな出発点をどういう形で設定するかが、事柄を左右する。

すなわち、貨幣取引のレベルでは、本文において述べたような、社会的資本としての貸付可能資本の〈自立性〉は析出されえず、その自立性が明示的に語られるときには、すでに一定の臨界点を越え、質的にも新次元にふみ込んで、利子つき資本の世界に至っているのである。また、〈自立性〉を語りえぬところでは、当然、〈仮空性〉も問われることがない。

- (6) 小稿におけるように、再生産の内に規定される外在者として利子つき資本をおさえ、社会的資本における〈自立性〉と〈仮空性〉を表裏したものとする立場は、銀行における〈貨幣取引と貸付取引との一体化的結合〉を問い、両者の一体化的結合を貫くものとして利子つき資本を見ようとするものである。貨幣取引がほんらい的に再生産内のものであるのに対し、貸付取引が再生産外のものであることは、特に注目すべき点である。